

## 日本吉を紡ぐ

## 生き様と直結する庭づくりは 人生そのもの

日本の庭は、日本の伝統美や文化にふれることのできる空間のひとつである。なかでも樹木や石、池などが人の手で整えられた茶庭や日本庭園は、建物や背景の景色と調和し、他に類のない美しさにあふれている。「しかし、このままだと日本庭園は衰退する」と危機感を募らせるとともに、「過去の壁を打ち破りたい」と語る庭師が京都にいる。国内外から高い評価を受け、「孤高の庭師」と呼ばれる北山安夫さんを訪ね、春まだ浅い古都へ出向いた。自身が修復を手がけた高台寺の庭に現れたのは、「勝負師」の雰囲気を漂わせた庭師だった。

現状を打破し、壁を破りたい

高台寺の庭で北山さんは「日本の庭を変えたい」と語った。「明治以降、庭の力はだんだん衰えてきた。自分も含めて襟を正さなければいけないにもかかわらず、目に見える益ばかり追求し、庭園の質が衰えていくことに対してなら手当てをしてくれなかった。僕はそれを『財産の食いつぶし』と言うてます。僕らはいいですよ、食いつぶすものがある

から。でも、次の世代にはないんです。だから反省もこめてなんとかしなければいけないと思っています」

危機感を募らせている背景には、こんな現状がある。「実は『石は五石ならこう組む、真ん中の石はこう置く』と書かれた教科書通りにやれば庭はできるんです。でも、そこに魂はこもっていませんし、感動にはつながりません。それが現在の作庭のつまらないところだし、その限界を打破しなかったら21、22世紀の日本庭園はないんです」

庭は見える道具ではない、というのが北山さんの視点だ。「これから庭師の本当の力量が問われるというときに困るのが文献。多くの本が日本庭園を極端に美化しすぎたり、ミニチュア化しすぎたりしたから、ただの見える道具になってきた。だから生活空間に負けるんです。僕は、庭は生活空間や、と提案しているわけです」

そこで、あえて公言する。「ええかっこう言わせてもらえば、必ず自分がその壁を破ってみせる。先人

たちのいいところを汲み、修業し、感性を培って庭づくりに挑む。昔の庭となら変わらないように見えますが、平安時代と平成の今とでは、庭は違って当然なんです。それをきちっと見せたい。庭師の成長、器の大きさに応じて、庭は変わっていくし、変わらなければいけない。そして400年前と同じに庭を維持・管理することは、最初に高台寺の庭をつくった小堀遠州(※1)に対する思いやりと尊敬なんです。遠州が描いた庭の完成形に対して自分がどう応えるのかということも大事なことです」

## ◎ 庭師 ◎

## 北山安夫さん

きたやま・やすお

北山造園代表。1948年、京都市生まれ。高校・大学と野球を続け、選手として活躍。高校から野球部監督の声がかかるが、大学卒業後、小宮山庭園創作所の故・小宮山博康さんに師事。26歳で独立。京都・高台寺をはじめ、その塔頭である圓徳院、日本最古の禪寺建仁寺、久保田一竹美術館(山梨県)、円通寺(佐賀県)など数多くの庭園修復や愛知万博「愛・地球博」森林ゾーンの日本院園の石組を担当。また、イタリアやアフリカなど海外での作庭も担っている。

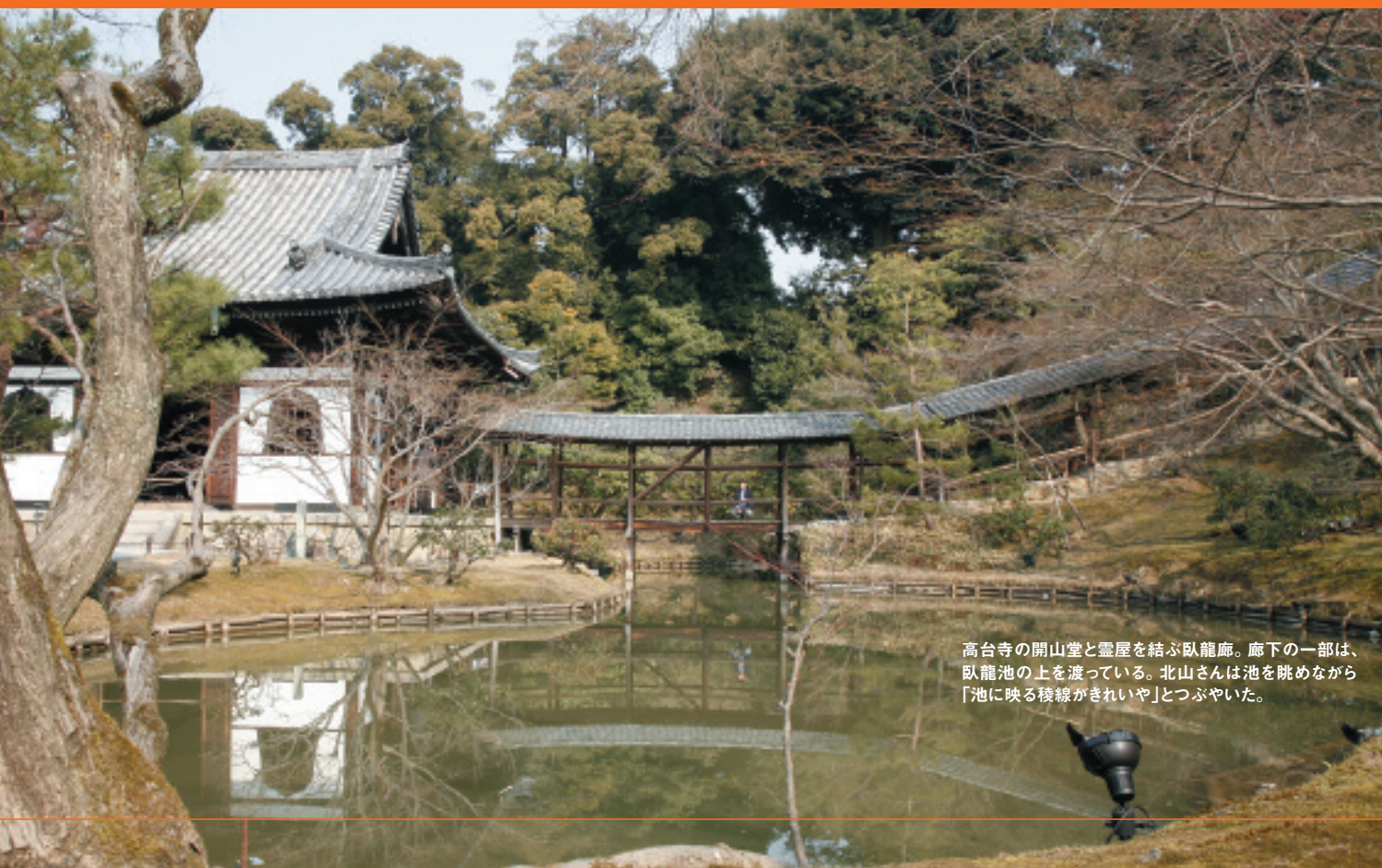
## 高台寺

京都・東山の山麓にある「秀吉とねねの寺」として著名な禅寺。正しくは高台寿聖禅寺。豊臣秀吉没後、その菩提を弔うために秀吉夫人の北政所が慶長11年(1606年)に開創。開山堂と霊屋、傘亭、時雨亭、表門、観月台などが国の重要文化財に指定されている。庭師・北山安夫さん監修のライトアップが行われる夜間特別拝観は期間限定。

<http://www.kodaiji.com/>



※1 高台寺の作庭を手がけた江戸初期の大名で茶人。千利休、古田織部と続いた茶道の本流を受け継ぎ、徳川家の茶道指南役を経て、作事奉行として桂離宮、仙洞御所、二条城、名古屋城などの建築・造園にも才能を発揮し、作庭家としても著名。



高台寺の開山堂と霊屋を結ぶ臥龍廊。廊下の一部は、臥龍池の上を渡っている。北山さんは池を眺めながら「池に映る稜線がきれいや」とつぶやいた。



## 一人ひとりの思いを 包み込む庭

北山さんは「庭も成長していく」と表現する。  
「庭づくりは、人づくりと同じで、成長していくかんとあかん。ところが、今の日本のものづくりでは、できたときが最高。国がつくる庭などは、未来の庭の成長や管理を考えていません。税金を使って庭をつくらせて終わりです。僕は形ができたところから出発する。成長させていくには30年くらいかかるんです。人間と同じで赤ちゃんの頃は手がかかる。庭も毎日手入れをする。樹木や景石が庭に定着して強くなったら、あまり手を入れないほうがよい。そこから『風格』と呼ばれる領域になるんです」

日本庭園の定義にも言及する。  
「実はみなさんの定義の狭さが、日本庭園を苦しめてるんです。海外では日本庭園は盆栽と同じように思われている。『自然を破壊している』とか言われている。それはとりもなおさず、日本人も同じく日本庭園を理解していない証拠なのです。そもそも日本庭園なんて定義をつくったらあかんのです」

確かに敷居の高そうな日本庭園から足が遠のく人はいる。たとえば寺院の庭ではどんな配慮が必要なのだろうか。  
「高台寺では日頃の生活空間とは違う雰囲気味わってもらい、来てよかった、英気を養えた、『へえ、こんなおもしろいことやってるんや。私も庭でこんなことしてみたい』と思ってもらえるなら幸せです」

さらに、庭を見る人の状況や心情にまで降りていく。  
「来られる方それぞれが主役で、いろんな思いで庭を歩いてもらえばいい。女性は彼氏と来たら楽しいでしょ。でも、愛する人を亡くした直後の人に庭は楽しく見えますか？ 同じ庭を見ている感じ方はぜんぜん違うわけです。いろんな人がいろんな気持ちを抱えてお寺に来られるんやから、庭もいろんな思いで迎えてあげたいわけです。だからこそ日本庭園にはおもてなしの心があるんです」

## 己を殺して 我を生かす

北山さんが重視するのは、施主の好みなのか、自身の個性なのか。  
「たとえば高台寺の庭の修復であれば自分の個性は殺し、小堀遠州と

という人を敬愛し、彼が何を考えたのかということに思いをはせます。  
ところが『庭をあなたに任せます』と言われたら、大いに北山安夫という個性を発揮しなければいけないわけです。その場合、肝心なのは『己(おのれ)を殺して我(われ)を生かす』という精神。自画自賛してはいけないし、我(が)を出してばかりでもいけない。  
自分を殺すことによって自分が育てられていく世界がある。それは庭を見にくる人への思いやりから生まれる考え方です。庭づくりには個性がなければダメですが、反対から見れば万人にも受け入れられるという自分の器をどれだけ表現できるかということにつながるのです」

北山さんは南アフリカのヨハネスブルグにある個人の庭園の作庭も担っている。文化、風土が異なる土地ではどんな心構えで挑むのか。  
「言葉が通じなくてもハートが通じればよい。でも、日本文化を押しつけたらあかん。どれだけのものを取り入れられる自分ができているかということが問われます。南アフリカでつくった茶室は、間取りだけ日本のもの。あとは壁も屋根もアフリカスタイル。実は庭園も茶室も柔軟なんです」

## プラスアルファ のある引き算

庭師にとって技術はすべてではない、と北山さんは言い切る。  
「弟子は十何人もいますが、うち(北山造園)では技術は学ぶもので教えるものではないんです。技術を覚えると確かに役には立ちますが、技術ばかり追い求めていたら人間のレベルを止めてしまいかねない。伸びていきたければ、技術も大切だが、技術よりも人間性を磨くことがより大切で、その磨いた人間性に値する仕事がある。その仕事に対してどの技術が必要か、という流れなんです。だからこそ修業時代にまんべんなくものを見て、経験を積んでおくことが大切なんです」

では、庭師に最も必要なものは何だろう。  
「庭を見て感動するのは、形のきれいさだけではないでしょう。庭師の



国の史跡・名勝に指定されている高台寺の庭園。「石組の名人」と評される北山さんは「石の位置や傾き加減は数センチ違うだけでバランスが崩れる」と表現する。

仕事でいちばん肝心なのは、庭を包み込む心です。庭を見る人に対する抱擁力、いわば愛です。必要なのは、まず自分自身を愛すること。そこから始まって初めて石が組めていく。その中に組み手の洗練されたセンス、感性が表れるわけです」

土地に石や木を配置する仕事は、もともとそれがない場所に置くことから一見「足し算」に思えるが、掘り下げていくと「引き算」なのかもしれない。そのことを聞いてみた。  
「その通りや。ものをつくるときは、できる限りいろんなことを考えてから、そぎ落としていくんやけど、もうひとつ大切なことがある。足し算では1足す1は必ず2になる。ところが、作庭の世界は1足す1が3にも4にもなる場合もあれば、2以上にしたいと頑張っているにもかかわらず、マイナスになる場合もある。  
そこで何が大事かと言えば、考えられることはすべて考えておいてから引き算すること。でも、ただ引いていだけやなくて、同時にそこにプラス



ライトアップされた開山堂と庭。北山さんは「ライトアップのメインディッシュは水鏡です」と教えてくれた。

アルファがなければあかん。それがハートなんです」

北山さんが「孤高の庭師」と呼ばれる背景が少しずつ見えてきた。  
「あるときから作家活動をしたいと思うようになった。『北山安夫の世界』をなんとかしたい、と。でも徒党を組んではいけなと考えた。一匹狼になってつぶれるようなら仕方がない。これは闘いや。誰と闘うのかと言えば、最終的には自分と闘うことになるんやけど、そこに自分の生き様を置きたいと思っています」

そう語る北山さんの顔に“勝負師”の表情が浮かんだ。その背景に北山さんの姿勢を映し込み、訪れた人を包み込む庭が広がっていた。  
「そう、庭は人生そのもの。僕の生き様と直結しているんです」

Text by : 綾瀬良太

## リンククラブ発の 新しいプロジェクト始動!



### 日本の美意識で綴る 自薦他薦無料サイト

#### 自薦他薦無料サイトです!

「日本吉」は、日本人がデザインしたもの、日本でつくられたもの、日本の文化が生きているものなど日本の美意識が表現されているものであれば、自薦他薦を問わずどなたでも記事や画像を無料で投稿できます。



#### 日本の美を世界へ発信します!

日本の美を世界に同時発信するために、英語による表示切替を設置しました。これによって世界中の人々に日本文化や美意識を紹介することができます。



#### マジックガーデンと結びついています!

マジックガーデンに出店中のショップで日本の美意識が表現されている商品は、日本吉からショップにリンクを張ることができます。その場合、マジックガーデンのロゴが表示されます。

にっぽんきち  
日本吉  
nippon-kichi

あらゆる日本の美意識をWEBサイトの中に集め、その豊かさを共有し、世界に発信していくこと。それが「日本吉」のコンセプトです。

# http://nippon-kichi.jp/

今月号の「はみだし互版」(2P)で「日本吉」の参加の仕方を詳しく説明しています。ぜひご覧ください。



北山さん自ら庭の見方を案内してくれた。「庭師はみなさんと庭とのつなぎ役やから、みなさんの気持ちもわからなくてはいけないし、自然界のこともわからんといかんけど、見る人は庭が何かなんてわからなくてもいいんです。それよりも、来てよかったと思ってくれることが大切。この枝が好きとかこっちの枝は嫌いとかいった感じ方で構わないんです」

